

土史と民俗の入門として読んでいただければ幸いです。参考のためにここに示す地図は、『徳地町誌』（徳地町、一九七五）からの引用で、徳地地域を構成する旧村と各地区の範囲を示すものです。なお、重源上人の事績を手軽に参照できるものとしては、重源上人入道八〇〇年記念誌編集委員会（一九八六）があります。

○民俗調査のころ

文部省の全国民俗地図の調査員になった昭和三十年代に、私は徳地町全体をまわって、いろいろ勉強しました。調査の方法ですか。素人だったので、調査項目にそって、まず食べ物を、次はあいさつを、それから年中行事をというように入っていました。男ですから、食べ物のこと、着る物、髪型のことなどがわからなくて苦労しました。

民俗資料の調査で民具を調べる時に、いつもメジャーを出して、笑われました。ああいうものの大きさは、使う人の体にあわせてあるので、人ごとに違うからです。例えば、鎌の長さは腕の長さ、稲を干すハゼの足は、身長に一尺を足すとか……。また、馬の高さは五尺、牛は四尺が基本ですから、そのあと、何寸あるかというので、「尺何寸」としかいわないんです。

先生方もご経験でしょうけれど、土地でいかにも知ったかぶりして話してくれる人がいますが、そういう人の話はあまりあてにならない。はなから物を知らない人も困るんですけれど。聞き取り調査は、一口話せばどのくらいこの人の話は真実かということがピンと頭にきます。私が聞いてきたことを先生方に話しておけば、後になって思い出していただけだろうと思っていろいろお話しています。

○徳地の石風呂

徳地の石風呂は現在も何か所かあります。岸見では年中焚きます。

串は子供会が五月の田植えの後に地域の方と一回、田植えがすんだとき、地域の人たちや、おじいちゃんおばあちゃんたちとすごそう、というので、焚いています。串の石風呂は本光寺の中にありますが、この日は楽しいですよ。

重源上人ゆかりの月輪寺（がちりんじ）のある島地の上村（かむら）という村では講をつくって、石風呂を頻繁に使います。月輪寺では地元の人が百万遍念仏などを繰ったりしています。歌ったり踊ったりしながら石風呂を焚きます。しかし今は天井の石が落ちそうに使わない。これら徳地のものは大島郡の久賀系の石風呂とはちがいます。周防大島のは湯気をたてる蒸気風呂。それに対して徳地は熱気風呂です。これは、人々が川に入って冷えたことからおこる病気の治療が目的で、蒸気を使いません。大島の場合は、塩田に入った人々の治療から蒸気のサウナになっていくようです。大島郡から徳地に習いに来た記録があるんです。蒸気浴は四国や豊後（大分）にもあって、国の文化財に指定されていますが、熱気浴から蒸気浴に進化したのです。中が黒くなるので、それを改良してサウナ形式に発展したわけです。和式のサウナは、聚楽第にあったものを解いて、西本願寺に移築したものがありません。ですから、日本の石風呂のもっとも原初的な形がここ徳地にあるんです。

重源さんが建てられた石風呂には、そばに念仏石というのがあって、それをおがむようになっています。たいがい字は彫ってないけれど、石風呂の開山を記念する碑がどの石風呂も横に立っているものです。行者の人達がきて作善として開いたものでしょう。

国立山口徳地少年自然の家に石風呂を作ろうとしたとき、建設省の人が熱心で、私に聞きにきました。それで、修理する人に聞いて作っただんですが、まずは、熱に強い石と赤土です。石と石をせりあわせてきた面を大切にしてドームにするのです。ところが、絶対にくずれ

てはいかん、鉄板も使うし、非常口もいるなどというので、とても苦心されたのです。岸見の石風呂は中は石垣みたいですよ。中に入って石の隙間に三十センチくらいの竹を刺してみると石の傾きぐあいわかります。一番上の蓋石は平たい大きいものです。焚くと石と土の隙間からもわずかに煙が立ちのぼります。

石だけで土を使っていない石風呂もあります。梶畑集落の袈裟岩様のところの三角形の形をした石風呂は石だけでできている姿ですが、雨が降っても中に水が入りませんよ。石風呂はもともとは赤土を使わず石だけのものだったでしょう。

秋、稲刈りが終わって、田に麦を蒔きます。雨に濡れたら寒くて、風邪をひきます。そんな日は石風呂の責任者が石風呂を焚いて、夕方の四時くらいから拍子木をたたきます。それを聞いた人々は「今日は焚くんだな」と合点して、仕事をすませて集まって来ます。めいめいが米ひとにぎり持ってきて、前のいろりで粥を炊いて食べます。体の具合の悪い人は、朝まで入って帰ります。

月輪寺の石風呂は寺のすぐ裏にあり、休息をする所でした。

島地で関連する寺としては浄土宗の寺で観念寺があります。ここは、建物こそ古くありませんが、お茶をわかすところ、休む所、土間、街としての体裁を整えて、町の人や、お医者さん、神主さんなんかでも入れるようにしてありました。それが、今なんだかくずれそうになっているというんですが、石風呂は、古墳と同じ作りで、崩れるもんじゃないんですが。

島地のような町でなくて、普通の村の場合は石風呂は雑魚寝の場所があるだけです。

女性の生理の時は入ってはいけません。入ると蟻が出てくるとか天井の石が落ちてくるとか言われています。

石風呂の燃料は、大きな薪ではなくて、木の葉と箸くらいの小枝が

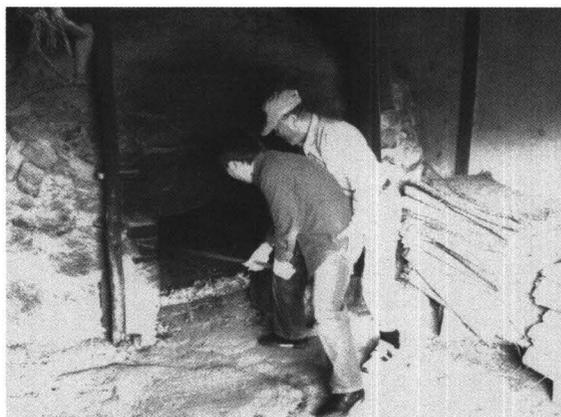
主です。石風呂は薪をいっつも心配しておくもので、一度焚くにはひとかかえある柴が八把から十二把くらい必要なんです。この燃料の調達には石風呂奉行がとりしきります。今なら部落会長さんですね。燃料を集めたその人が灰をもらいます。灰の質がいいのかコンニャクづくり、クルミ、染め物などの灰として使いました。灰は高価なもので、米一升、灰一升が昔からの相場です。この灰だけが石風呂を焚く人の収入、焚き賃だったんです。

石風呂の修理など大金が要る時は集落の人たちが金を出します。木は奉行が自分で集めたり、買ったります。昔は秋になれば毎日焚いたものです。松や杉はだめで、広葉樹がいいのです。

——この十一月に大学院の授業で、岸見の石風呂の体験学習をさせていただきます(写真1)。

○古い祭り

才契(さいちぎり)という集落で、年に二回の祭をやりまます。この村でトウヤを決めて、山のお堂のお大師さんを家に連れて帰られて家でお祭りをします。春と秋の彼岸です。それには、山の大きな竹を切つて竹筒をつくり、長さ七寸、太さ三寸ほどの筒へ寿司をつめた「かっ



(写真1) 真赤なおきをかき出す。

「は寿司」というものを作って、これを二本と地藏さんの頭ぐらいのまん丸いおにぎりを一つの三点セットをふるまいます。一人あたり一升飯です。それだけを今の人は食べ切れませんけれど、昔は食べる人もあつたわけです。

法事の帰り、ある若者がお堂に寄ってみました。ちよつと遠回りしてもお堂に手を合わせて通るのが、ここらのやり方ですから。すると、そこに衰弱したお坊さまが寝ておられました。お坊さんは「腹へつてやれん(どうしようもない)」という返事です。お堂には炊事の道具もありますし、宿賃もいらないうえ、旅の者が立ち寄ります。田舎のものは気がいいので、もらっていたおにぎりをお坊さんにあげました。ひとつあげたけれど、もうひとつ欲しそつだったので、それもあげました。三つあつたおにぎりの最後の一つだけはどうしてももつて帰りたい。身重の妻や年寄りのために持ち帰りたい。それで、みんなあげたいけれど勘弁してくれ、というたんです。

すると、その坊さんは急に元気になり、「私は人を助ける僧という身でありながら、人のご飯を奪つてしまった。申し訳ないことをした。このお金で田をひとマチ(枚)買いなさい」ということで、それで求めたのが、この田です。個人でもらつてもいけないので、結局お堂に寄進しました。それからとれたお米(毎年の加徴米)がひとマチで一斗二升あつたので、お堂を守っていた六軒でわけたら、それでも一軒に二升ずつになります。一度に二升はどうい食べ切れないというので、それを春の彼岸と秋の彼岸にわけて一升ずつたぐようになつて、それ以来これまで一度も欠かさずにやっていますね。

このいきさつについてはまた違う説もあり、どれが正當なのかよくわかりません。しかし、底抜けに明るいお話で、強飯の状況が目には浮かぶようです。

行事の簡素化ということで、これはいまもめています。若い人たち

には「今時お米をそんなにたくさん食べやせん。そんな古いことを」と反対意見もあるようです。戦時中、米がないときはさつまいもにかえてでもやつてきた。これをできる間はやろうじゃないか、という年寄り派と、若い者を中心とする改革派との間で確執があるようです。お彼岸ですからもうすぐのお祭りなのに、どうなることか、私は心配しています。

○狗留孫山

才梨の集落の正面の山が周防の国の狗留孫山(くるそんざん)です。「くるそんざん」という名前の山は全国六、七カ所といわれ、歴史が古いところがあり、長門の国は豊田町にあります。天武天皇の時代に祀らせたものです。実は、須佐にも小さい場所で狗留孫山の地名をもつた所がありました。普通一國一カ所なのに、山口県には三カ所あることになりました。まあ、須佐は石見に近いかもしれませんが。

古い由緒があるといえ、なんといつても徳地では聖徳太子が開かれた清涼寺(現在は鹿野町)から始まります。仁保から徳地に入る荷卸峠から見ると天気があれば鉄塔がたくさん立っている山が見えます。その麓が清涼寺のあつたところ。昔は麓にたくさん家があり、徳地のどこからでも行けた所です。信仰のひとつの中心ですね。重源さんは清涼寺の仏像を大切にしながら言つて分散させました。そのおかげで徳地には平安・鎌倉の仏像が三十体余り文化財になっています。まだ未指定のものが十体以上あります。

○袈裟岩のお祭り

五月五日には、三谷の梶畑の袈裟岩のお祭りがあります。重源上人が岩に袈裟を掛けたところ、その袈裟の模様が岩に着いたということでお祀りしているんです。ところが最近では同じ日に月輪寺でお祭りが

あります。子ども達が参加できるようにこの日取りにしたのですが、かちあってしまって、私はひとつに一年おきにしか出られなくなっていきます。袈裟岩のお祭りには、細い山道にいっぱい車が止まって困るくらい、人があつまってきますよ。現在は三軒しかないのに、その日は人がいっぱいになります。

○三谷の棚田

三谷の木地屋というところの石組みはすばらしいです。この積み方は歴史的には古く、横組みとかこぼ積みとか言います。ここでは、一枚の棚田が崩れたら下の人家も崩れます。人も死にます。ですから、絶対に崩れてはいけない、崩れない技術です。石垣のひとつひとつがダムの役目をしています。菅笠をとりあげたら、その下に田が三枚あったとか、餌桶をのけたらその下に田が何枚あったとか、そういうたとえ話しが伝わっているほど、小さい棚田が多いんです。小さな田に給水と配水の水路をつけたら稲を植える面積がなくなりますから、それをすべて暗渠にしてあるというすごい技術なんです。桃の木の手こら辺なんかすばらしいものだったのに、それをコンクリートで補修したりしてしまうんです。時代が下がると棚田の石垣が横に長い石を並べるようになってきます。これは、牛や馬にひかせる鋤の先が鋳物になってきたからで、石にひつかかって先が折れるのを防ぐためでした。棚田は小さい方がいいのです。水がない年にはいくつかの田を犠牲にしてひとつの田をつくれれば狭い田で米がつかれます。いまのようにやたら広い田にしてしまうと、水がない年にはどうにもなりません。

○昔の人の知恵

三谷の国木の板落としというところは、重源さんが材木を落としたという場所で、今も木が生えませんが、ここで写真を撮るときは、雪が

残っている時がいいですよ。そこだけ真っ白くなるのでよくわかります。

また、このあたりの山の中には日計り岩というのがあります。大きな岩の周りの木を切っておいて、夕日が沈むのにあわせて山の影が向かいの山を這い上がっていきます。影が、その岩のところまで来たら、仕事をやめて家にもどるんです。そうしないと冬は日が短く、つるべ落としに日が暮れてきてあたりが真っ暗になりますから。

川には水計り岩もあります。そこまで水が来たら避難せよ、という昔からの知恵です。今ごろの人は、ダムの放流の前にはサイレンがあるとか、いざとなれば自衛隊が助けてくれるなんて思っています。現に昭和二十年代の台風では人が流れていますから、人任せにするのは愚かなことです。

○山の神のはなし

徳地は山国ですから、一番大事な神様は、山の神様です。その山の神様が、春に田に降りてきて、田の神になられて、秋にはまた山に帰って山の神になられます(写真2)。

山の神様の祭は、旧の三月九日と九月九日に行います。その時には魚のオコゼをあげます。魚屋がオコゼかアンコウをもつて来なかった年には、赤



(写真2) 山にかかる雲

オコゼと称する小魚を川でとって山の神様に差し上げます。とげのあ
る魚で海のおコゼの代用品です。

杣が信じている神様は、コノハノサクヤヒメです。オコゼやアンコ
ウをあげる訳は、実はこの神様が不美人なので、それより器量の悪い
魚をあげないと怒られるということだといひます。

滑(なめら)では、山の神祭りには男性のシンボルを竹やカヤで巨
大な形に作ります。それを若者がかついで山の神にささげたあと焼く
んです。この祭には相撲が来るし、伊勢神楽といってサーカスマが
いのぎやかな神楽が来たりして、ずいぶん派手な祭りだったそうです。
山の神祭りは営林署でもきちんとやります。

山の神様は春に山に木の種をまかれて、秋には、それがどれだけ育つ
たかを数えて回られるんです。その日に不用意に山に行つて山の神に
出あえば、「人かくし」にあうからといひて休みます。

——そういう「人かくし」の例はありますか？
それはいくらでもありますよ。

○木を大事にした防府の人

毛利藩は各地に「お立山」など藩御用の森林をもっていました。森
は一度切れば、また使えるまで育つには何十年もかかります。防府の
人は小銭が落ちていても拾わないけれど、まきが落ちていたらひろう、
といわれるぐらい木を大事にしたものです。防府は三田尻の塩焚き用
の薪を四国から買っていましたから。同様に瀬戸内海の岸の森林も大
切にされ、魚の繁殖の環境を守るための森林保護はすごく熱が入って
いました。

○聖岩の伝承

三谷の聖岩というのは、ろくろを山の上に据えて、大木を山の上に

引き上げて反対側に落とすという信じられないようなことをした場所
です。聖岩(ひじりいわ)という名前の大岩があります(棚田の石垣
の中の二メートル四方ほどの岩)。ここに重源上人が立つて、これか
らとりかかる難事業の説明と協力依頼をされた、ということになって
います。

この岩のところの川に山越えしてきた材木を直角に落とします。そ
の衝撃を和らげるために土井という砂山をつくり、そこへぶつつけま
す。直角に落としてきた材を根を川下を向くように曲げる(ひじる)、
そのためのこの支点にした岩、というのがもともとの意味ですが、
もちろん重源さんの聖もかけているんです。

『徳地町史』には、この岩から上を焼いた焼畑関係地名として「火
いじり岩」という語源説があつたと記されています(徳地町、一九七
五、七八頁)。

木というのは、根の方が重いので、元末が分からないときは、水に
入れて沈む方が元です。それで、川を流す時にも根を下にします。根
の部分の削つて四角に仕上げ、それをブレーキにしないと滑り出した
ら大変なんです。なにしろ、寝かせても向こうが見えないくらいの大
木ですから。

——この川を流したんですね……。

そうです。道は曲がっているけれど川は比較的まっすぐです。川の
改修にはたいへんなお金がかかります。この川に大金をかけたから、
この川に木材を集めて流したんです。まわりの山の木も、ひとつ向こ
うの山々の木も、ここへ集めて流しました。

○狼岩

狼岩という大岩が三谷の久鬼が原の道の下に見えています。

馬羊犬などの足跡が鮮明に残っている岩で、伝承によると、狼や熊

が作業を妨害したので、重源さんが加持祈禱をしたところおとなしくなりました。そのあと、けものたちは重源上人の姿を見るとこの岩の上でおがんだといひます。畜生岩とも獣岩とも百獣岩ともいひます。深さ三センチほどのはつきりした足跡がついています。

ある時私は高校生を見学につれてきて調査したことがあります。厚くつもった落ち葉を掃いて岩を掃除したところに雨が降りました。雨に洗われたら、これまで気付かなかった人の背ほどの仏の姿が何体もでてきたんです。その肩と肩の間に三十センチぐらいの座像もあるのが一つははつきり見えるところもありました。狼岩とは拝み岩のことと理解すればわかりやすくはあります。

この石の下側を掘ってみたら、火をたいした跡の炭が出てきました。いつものものかわかりませんが、たいまつ火種をいつものこしておく場所だったんだらう、とぴんときました。

ここは、鎌倉時代、東大寺再建用材運搬のため、昼夜をわかつた何百人も越えた山道です。夜に通るためには、たいまつを持って歩きますが、観音堂と地藏堂の中間にたいまつの中継地が必要でした。その中継地になった場所だろうというのが、私の考えです。

○梶畑の一升埵

聖岩の山の上には、重源上人が山から山へ木を引き上げ、そして三谷川に落として流したあとがあります。左右に木材がそれないように、木がめりこまないように斜面にV字型に石を埋めて仕掛けを造って落としてきました。この平らな場所を一升埵（いっしょうだお）といいます。

重源さんは、山の上へ向けて道を開いた。「それはどこに行く道ですか？」と地元の人々が問うたら、「東大寺に向かう道だ」とおっしゃったというんです。驚いたでしょう。よほど感心したのか梶畑では名前を呼ぶのも恐れ多いとて「大上人様」としかいいません。

最長四十メートル、先端の芯材の部分の直径が一・二メートルあるという巨木です。太い柱は人間が立つても向こうが見えない巨大なものです。根は八畳の間ぐらいの大きさがあつたといひます。これが転がったら人間はみんなべしゃんこになります。ですから、根方を四角く切っておくことは、そうした事故の防止にもつながるというわけです。

百二十本切つて、十二、三本しか合格して奈良に送られる木がなかったといひますから合格率はわずか一割です。途中に木の検査をする場所がありました。

○ろくろという仕掛け

重源さんがろくろ二張りで木を引き上げたという話は、僕が言い始めたんです。五十年ぐらい前、女房とふたりで学校が終わつてここにワラビを採りにきました。今よりも見通しがよくて、よく見ると二か所ゆるい（平らな）所があります。見てすぐ分かりました。地元八坂の年寄りに訊ねてみると、「そのとおり」という返事でした。大木が一升埵を越えたんです。「石畳の道もある。ろくろ場というものも地名に残っている」といひます。

巨大なロープも使いました。太さ十八センチ。長さ百五十メートル。三十センチ持ち上げるのに、三十人の人が必要だったと記されている麻の縄です。これは佐波川の上流に最近まで残つていたんです。

重源上人が山の尾根にたつて暮れかかる太陽を招き挙げたと伝わっている話は、ろくろで峠越しさせた時の話でしょう。わざわざ文書に残しているくらいですから。

昔のことに詳しい人や、いっしょに山を歩いてくれる人が当時三人ぐらいました。女房の機嫌が悪くなるくらい山についていました。一升埵を越えたいと言つと、どうぞ越えてくださいといひるので、テレビ

局の人といっしょに越えたことがあります。

ろくろで引き上げるにしても地形が複雑だから、まっすぐに木が揚げられないが、と思っていましたら、ここには、字を書いた岩が山の中にある、というんです。その字を鉛筆で書いてもらって見たら、梵字なんです。そこで、その石に傷がないですか？と聞いたら、それがあると言うんです。岩にロープをかけたときの擦り傷なんです。ですから、長いロープで引つ張り上げるときに綱でこすれた柔らかい材質の岩なんです。

重源さんは、谷を埋めたり道を作ったりしました。三百丁(約三十キロ)の作業道をつけたと古文書があるので、清涼寺の所から佐波川上流まで測ってみたら本当に三十キロあるんです。出まかせで書いてあるんじゃないんだ、ということを感じました。川にダムと水路を作る関水にしても、少年自然の家の麓の所に百二十箇所あるというけれど、これもいいかげんな数字じゃなかったんです。

○梶畑の大杉

今おられるおばあさんが、お嫁に来たとき、あの車庫の前に大きな杉の根っこがあつて、その腐つたのを毎年掘っては捨てて花畑にしたといひます。重源さんの時代に倒した杉です。昭和の大水害までは先の方も残つていて、これは切つても切つても芽がふくので気持ちが悪いかからとうとう火を焚いて枯らしたんです。この杉は、切り株と先っほだけ残つていて、大事にされていた木です。真ん中の部分は、ろくろで木をあげて落とす試しに使われました。杉ですから寺が建つような柱ではないんですが、あくまで実験用ですね。徳地の記念館を開館する時に当時の大きな木株を展示したいと思ひ、一株を切つてくれと頼んだのですが、切れんからと爆破してしまつてこなごなでもう何も使ひものにはなりませんでした。

○毎年神殿をつくつてやる徳地の神楽

徳地の神楽は古いんです。しかし、神楽の道具の古いものが残つていないんですね。ここでは天保何年かの、俄道具というものも残つています。そう古いとはいえないと思ひますが、二十戸から三十戸の村なら、かならず神楽が奉納されています。徳地は出雲に近いから出雲神楽です。天の岩戸の開くまで、になつております。ここでは大蛇の退治をしません。ですから、地味な神楽です。しかし自治会ごとの競争で一生涯懸命にやつたみたいです。

徳地の神楽は必ず神殿(カンドン)という仮の小屋をつくつてやります。その材料の竹と木材を持って集まります。せっかくつくつた神殿ですが、神楽が終わるとすぐに解きます。

盆が過ぎると青年が集まつてきて、配役がきまります。秋の収穫が終わつてから練習に入ります。それがおもしろいんです。タジカラオウノミコトの役があつたら、材木を担いで歩いていても、そのような歩き方、所作になつていひるんです。徳地では神様に奉納する神楽ですから、せっかく建てた神殿の方向に向いてやりますが、よそでは見せ物の場合は、客の方を向いてやつていひます。

稽古を続けて、最後には二十戸の村なら上流の家から一晩ずつ順番に家を廻つて稽古します。迎える家は簡単な料理を作りました。楽しんでみだつたみたいです。盆過ぎから秋の収穫が終わつての慰労ですね。家に娘がおれば夜でも村の若い衆が遊びに来てくれる。火事とか夜中に事があつた時に、若い衆がすぐ集まつてくる。小米餅を搗くのは大変で、三日も四日かかります。娘がおれば若い男性が来てくれて助かつた。若者が遊びにくるようにしむけたんでしょね。

○引谷のお稲荷さんのキツネは竹をくわえていひる

この辺はお酒のことをササともいひます。「おササをおやりになり

ますか」などと進めたものです。ササニシキというお米のササも稲の意味でしょう、お稲荷さんはいたい稲をくわえているのに、八坂地区のお宮では竹をくわえている例があります。お稲荷さんは、稲を食べてネズミがふえるのを狐が食べてくれる、という意味で狐が守り神です。稲をくわえて、つまり稲を背負ってきたという意味で、狐が作物の神とされ、稲荷とも書き、それで稲をくわえているわけです。八坂の引谷集落では、竹をそなえてあります。

そのわけは、引谷が徳地では一番遅くまでササの実を食べた所といわれます。丈の低いササです。実が成る時期に刈って帰って筵の上に広げて、たたいて実を集めて食べていました。木の実ではクリ、トチ、シイなどを食べたと言っていました。引谷はなだらかな丘陵地帯のいいところです。そして、古い物事がよく残っていましたね。

竹は花が咲いたら一斉に枯れます。笹はこちらの山に花が咲いて実がついて枯れても、次の年にはあちら側が咲く。うまくできたものです。

笹の実は、どうやってたべたものでしょうね。ポン菓子のようにふわふわしていて、お粥くらいにしかならなかったでしょう。

○銅鐸と銅鏡の出た村

引谷では白石山から銅鐸がでていります。八坂地区の人がみつけたんです。それを見た人が、釣り鐘をツヤカシタ（押しつぶした）ような形のものであったと言っています。二人の人が見えています。

白石山の上の五十人も入れるような岩屋の近くで銅鐸をみつけた若者が、家にもってきたら、それが、夜になるとがたがた騒ぐんです。それが気持ち悪いんで、布にくるんで返しに行つたそうです。

その銅鐸を、人が見えています。大型銅鐸というのは、子どもぐらいありますから、目立ちますよ。白石山は霊場だから、よくおことわり

をいうて、戻してきます、というてどこかにもっていったようです。それつきり、その場所がわからなくなっています。銅鏡もあります、これは引谷で畑の開作をしたとき、出てきたものといわれています。

——こんど、県立大学と徳地町が提携を結びました。それで、サテライトキャンパスとして使わせていただくことになったのが、引谷小学校の跡地なんです。地元のいろいろな伝承にも興味がありますね。

○島地は和紙で栄えた町でした

島地の街は「徳地和紙」という高級和紙の拠点でした。紙の買い付けのために北前船の新潟・弘前・函館の商人の旦那衆が集まります。だから、街もにぎやかで、神社仏閣が多いんです。街がよれてはいけないので専門のそうじ係も要ります。「餅座」といって餅つきの専門家もいました。白から蒸籠から一式を荷車に積んで街を餅を搗いてまわる仕事です。この餅は商店のサービス品です。紙を徳地に持って集まってきて等級がつかます。その紙を買うときにちよつとでも多く買い付けるためのサービス合戦でした。店の前で餅を搗いてくれるんですから。紙は重いですが牛な

どに引かせた荷車で持つて来ます。腹が減るから餅はうれしかったです。商人によつては下駄をくれたりもしました（写真3）。



(写真3) 現在の島地集落

の月輪寺の薬師堂の境内でお薬師の日。この日は、紙を売って年一回の現金収入のある日です。この金で娘の婚礼の晴れ着を買おうとか、それぞれの計画がかないます。にわか芝居演劇も出てにぎわいます。紙漉きのほこり落としをしました。紙漉きの仕舞い薬師と言っていました。

○徳地の人形浄瑠璃

徳地には人形浄瑠璃があつて、子ども達が練習して六月に重源の郷で披露しています。

本当の人形浄瑠璃は、大型人形で、三人でやっと操作するようでしょう。徳地人形は、小さく作って、一人でみんな操作できるようにしてあるんです。まあ、大きなものは経費が大変ですから。

今のは、頭は陶器で、博多人形ですから、りっぱなものですけれど、昔は、そんなお金がないので、桐の木を切つてつくつて、それに顔形をかいたりしていました。もつとお金がない場合は、紙の産地ですから、紙粘土で顔の形を作つたんです。

三味線と語りの人と人形つかいの二人組みで上演できました。全国を回つたものですが、行つた先のできごとを聞いて、それをすぐに芝居にするというので、大変に人気があつたものでした。

舞台といつても、たたま一枚ほどの大きさですから、そこにせいぜい一人しか入れません。ですから、一人で順番に操作していきます。母と娘が泣く場面なんかは、一人で二体操作します。

のちには、昔からの浄瑠璃だけでなく、頭と衣装を取り替えて、新しい劇もやりよつたです。

もともとは大阪とかから来た商人が、紙の買い付けをする間、たいくつするでしょう。それらの人たちが退屈しのぎに、人形浄瑠璃をはじめたんでしょうね。

山口で謡いをうたうな、徳地で浄瑠璃を語るなど言われるくらい、みんなよくやりよつたです。歌舞伎もさかんで、僕なんかやりました。歌舞伎は、とりのりの人のせりふもわかつていないと、できなすすよ。冬なんか、回数券をもつて、お師匠さんのところへ習いにいったものです。

○歴史ある徳地の和紙

津和野の源氏巻を扱っている店あたりにあつた店を徳地屋といえます。大阪の淀屋橋や、遠くは青森など、全国のあちこちに徳地屋という屋号の家がありました。これは、徳地の紙を扱っていた商店だったんですね。延喜の時代から徳地は紙の産地として著名で、斐紙と記録されています。大内・毛利時代には高級美術紙や大奉書、小奉書、毛利藩の藩札などを漉いていました。明治以降は温室のガラスがわりの温床油紙や、ふすま紙、傘、置き薬の袋、煮干しを入れる袋までいろいろ漉いていたわけです。能美佐渡の守という人が紙の改良をして、厚い青線紙、鳥の子紙を大きく漉いた間に合い紙などをつくりました。青線紙には横に青い波線が入っていますが、これは能美家の秘法でした。毛利公専用の手紙の包装紙がこれでしたが、この色が今出せないんです。藍でやってもだめでした。鳥の子紙は、ちよつとくすんだ紙ですが、引つ張つてもさけない強い紙です。紙を切りそろえた耳の部分の、その細い紙を撚つて帯を織ることもありました。なかなか高級な女性の帯でしたよ。

毛利藩の紙だけを漉く家があり、これは私の家の近くの家ですが、五百石をもらつていたらしいです。能美氏の所で紙を納めるのが遅れたのか、途中から工場を代官所に移して漉いたそうです。ここの代官所は大きかったです。徳地のインターチェンジ前にある家で、そこに寺もあります。能美氏に代わつて漉くようになったのは、能美氏の

ところで働いていた、弘（ひろし）清蔵・友蔵という二人兄弟で、明治になって姓をつけてよいと言われたときに、能美家から姓をいただいて、今もここに二軒あります。

○和田の紙漉き人の話

関ヶ原の戦いに負けて石高を減らされて苦しくなった財政を毛利藩は米と紙と塩の三白政策で立て直し、借金を皆返したといえます。その一翼を担ったのが徳地の和紙です。今の周南市の和田埴村（たおむら、図1）柘谷というところに紙の商人がいました。源八さんという人です。紙で生計を立てる紙漉百姓でもあった人だったでしょうね。田の広さに応じて希望者だけは石高に応じて紙を漉いて納めることもできたのです。コウゾ一本でお金になり年寄り・子供にも現金収入が入るという状態でありました。藩の専売品になって、紙百姓の生活が苦しくなってきた時には、藩からの補助金が出ましたが、徳地では代官がその金を懐に入れて私腹を肥やしていたんです。

それを知った源八さんは腹を立て、徳地の世話人を集めて談合ヶ原で会議をし、代官所に申し立てました。つまり直訴をしたんです。源八が一人の責任で萩に直訴しましたが、代官の不正の証拠がないといけないので、源八は自分のすく紙に白髪を入れて、代官が良い紙を等級外として外し、ごまかした紙を売買してもうけていることをつきとめたんです。ところが、藩はおそれおおくもお上に納める紙に、おのれの汚らわしい白髪を入れたとは不潔なり、といってやりこめたんですね。藩は暴動をおそれ萩の本藩では源八さんの首を斬れませんでした。源八は徳地に戻されて帰ってくるんですが、山道をぬけて、八坂と山口宮野と野谷の三つの道が集まる三叉路にきました。ここまできた時、そこにいたおばあちゃんに道を聞いたら、ちょうど手に持った大根で道を指したそうです。十二月も暮れです。ここで役人につか

まりました。野津峠の松にしばられて、首を切ろうとすると、首を挙げて大声で役人の非をならすので、前から胸を槍でついて、首が下がったところを、ようやく後ろから首をはねたというんです。この松の木は、最近枯れましたが「源八の首切り松」と呼ばれていました。そこに墓もあります。和田の人が源八がさらしものになっていてというので若者たちが体だけ桶に入れて和田に持ち帰り、三汲寺（曹洞宗）に葬りました。和田の柘谷の源八が徳地の引谷の柘谷で処刑されたわけです。過去帳は三汲寺にあります。

○源八をめぐって、三人の出会い

僕らが徴兵検査を受けたときには、肝試しでその首斬り松に名札をつけにいったことがあります。場所は、今は山口市で、徳地町境の五メートルくらい山口市にかかっている所です。今産廃の処分場になっている先です。ここで田畑をつくってきたのは、山口側の仁保の人です。

私が首切り松のことを本気で調べだしたら、和田の校長さんも源八を調べていたのです。松のあるところの地元のお年寄りでくわしい方がいました。その方は原田唯一さんといいます。原田さんは、自転車に乗らない人なのに和田のお寺まで行って調べ、過去帳も見ました。昭和二十六年の水害でこの部落は大きな被害を受けました。その他にもひよつとすると源八さんのたたりじゃないかと思われることがあつたらしく、私も入れて三人の源八調べでこの話がつながりました。原田さんと私とは話がよくあって、地元の人たちと現場で法要をしました。ちょうど大雪が降って、二百年目かの節目にあたっていました。「源八さんがよろこんでる」と言って原田さんも喜んでいました。

○松柄焼のふるさと

源八さんの首切り松があった引谷は面白い所です。引谷と仁保の松柄集落はすぐ側で、松柄(まつから)焼という焼き物もあります。瓦だけでなく皿などの日用品も造っていました。窯跡もたくさんあります。

そしてこの引谷村には昔シイの樹林があって、大内氏が入札金をとって三田尻から徳地までコジイの実をひろいに行つたという所です。

○山頭火の思い出

種田山頭火の話ですが、うちによく来ました。うちは、方言でホイトといいます、ものもらいの人たちにもよく物をあげましたから。徳地の堀の街は、家が詰んでいて、夕方の食事の準備のためにみんなが家におる時に回れば、お米の二升や三升集めるのはわかりません。だからよくうちで時間調整をしておつたんですね、

ところが、種田という人は、うちの親父と同じで、偏屈なんです。山頭火はもともとが金持ちのおぼっちゃんですから、お世辞をよう言わんです。「おい、種田、おまえはホイトが下手じゃのお」と親父はよくじくり(からかい)よつたです。

うちの親父は、天神様の刀をといだもので、ふざけちゃんばらをやつて、わき腹を切つたことがあります。その治療のために田をとられました。昔は病気をしてもお金がないんです。田を質に置くしかありません。

そうしたら、種田が「そういう金に困つた時は、わしに相談せんか」といよいよつたんです(笑い)。種田は、もともとそういう知識はあつたでしょうが、ホイトに言われれば腹が立つ。それでまた喧嘩になるんですけれど、二、三日したらまた種田のホイトが来ている。

お粥のひや(冷たい)のをあげようか、暑い時期にはそれもおいしいからというてね。そのときにキンカイモという芋の煮たのかなん

かも添えてもろうて種田が食うところへ、近所の子どもが珍しそうに集まってきました。種田は、子どもがきらいなのに、一所懸命お世辞を言おうとしたのですが、適当な言葉が出ず、つい「貧乏人の子沢山じゃのお」というたんです。お袋は賢い人ですから、口には出しませんが、顔色が変わりました。

案の定、夜になってお袋は親父に言うたのでしよう。親父はいつか種田をやつつけてやろうと思つてるところへ、二、三日後に出会つたんです。親父が荷を担うて通りすがると狭い板橋の上で出会いそうになつて、種田は橋をゆずるために河原で待つとつたらしいです。橋を渡りきつたところで、親父は荷を担うたまま、種田の所へ大回りして行きました。そこに、もう一人のホイトがいました。貰えさえすればそれでいい、というようなあまりたちの良くないホイトです。そこで、親父は「おい、種田、おまえホイト同士でも相談があるんかい」というてやつた。なんとか言い返せた気がしたんでしよう、それで気が晴れてうれしかったと二回も三回も言うていました。種田は種田できよとんとしていたそうです。

佐波農林高校の前が太さ一尺あまりの桜並木のある土手になっています。私が子どものころには、ごみ捨て場になつて寂しい所でした。秋は曼珠沙華が真っ赤に咲きます。そこに、ホイトが立っていて、手を振つて私を呼ぶんです。ホイトは恐ろしいものと思つていましたが、見れば種田です。顔見知りだから走つて行きました。揚砂のところに板橋があり、流れたら掛けかえの時に使うための杉が植えてある。それに狗留孫山へさす夕日があたります。当時は、おふくろが、毎日草履をつくつてくれました。うちは子どもが多いから、四、五足ぐらひは毎晩作るんですよ。草履は濡れるとすぐにつまらんことになるので、草履を大事にしたいと思つて気をつけて、水たまりを避けながら走つていったことを今でもよく覚えています。

そしたらホイトの種田が私に銭をくれたんです。穴のあいたお金とみかんひとつを私に渡して、「おらあ、一時もどらんでよ」と言いました。それだけです。親に伝えておけとも言わないんです。用件しか言わん人でした。

○時代の変化の中の文学者たち

うちは一家で下手な俳句をするんですが、おかしなもんです。あんなにばかにしていたホイトの種田が、今では俳句の大家なんです。佐藤サキノさんという人が奥さんで、徳地から嫁にいったんです。その家の人は「種田は、しょっちゅう無心に来りましたから、最近は家にもあげず、書いて持ってきたものもみんな焼いてしまうた」と言っていました。今、残ってあつたらよかつたと残念がつておられました（笑い）。

また、徳地の林タキノさんは与謝野鉄幹（寛）の二番目の妻でした。『明星』の発行などを経済的にささえたのは、林タキノの力です。大事な婿扱いですから、山を売ったり田を売ったりして、それで『明星』ができて、そのあと結婚した晶子さんは「乱れ髪」などで売れます。それを支えたのが徳地の林タキノさんだったことは忘れられています。実はこの林タキノさんと山頭火の奥さんはいとこ同士なんです。面白いことです。タキノさんは、岡山の正富旺洋という人と結婚して、そのあと子どもも多く生まれました。

引用文献

赤木森、二〇〇四「東大寺を建てた徳地の木」安溪遊地編『やまぐち』は日本一——山・川・海のことづて』弦書房、四三〜五三頁。

重源上人入道八〇〇年記念誌編集委員会、一九八六『徳地の俊乗房重源』徳地町

徳地町、一九七五『徳地町史』徳地町
(山口県立国際文化学部／山口県立大学・山口大学非常勤講師)